


 書評

広沢正孝 著

統合失調症を理解する

彼らの生きる世界と精神科リハビリテーション

加藤 敏

臨床経験に根ざして行動特性を周致に論じた者

今日、統合失調症の病態をめぐる分子生物学、神経心理学、脳画像などさまざまな最新のアプローチにより多くの生物学的知見が出されている。しかし残念ながら、統合失調症の病因を特定し、確定診断に資するような決定的な知見は得られていない。遺伝子レベルの病因についていうと、大方の一致をみているのは、統合失調症は単一遺伝子病ではなく、多数の遺伝子によって重層決定される多遺伝子病 (polygenic disease) だということである。

ごく最近のヒトゲノムの解析研究の最前線からは、健常者における DNA の構造的変異が (せいぜい 1% という) 当初の見込みとは裏腹に、かなりの程度にみられるという「人間の多様性に関する驚くべき結論」(Nature vol.435, 2005) が出され、もはやヒトゲノムの標準版はないと明言する学者もいる。この知見は統合失調症の病因を特定の遺伝子異常に帰すことの限界を示唆する。

また一卵性遺伝子での遺伝子発現にかかわる調節部位 (エピジェノム) の研究において、双生児の年齢が上がるにつれ、あるいは生活環境の違いが大きいほど、エピジェノムの分子の不一致度が増加することが明らかにされている。この知見は、統合失調症の発病過程、および経過を考えるうえで、心理社会的因子が大きな役割を果たしていることの傍証となる。要するに、こういってよければ DNA の「二重らせん」に環境のらせんがからむ「三重らせん」が、統合失調症の病因研究、治療法の洗練に要請される今日的なパラダイムといえるだろう。こうして、統合失調症の病態理解において、生物学的アプローチと並び、社会精神医学を含む広義の

精神病理学的アプローチの重要性が改めて浮上してきているのが現代の動向だと思われる。

わが国は国際的にみて、ドイツ、フランスと並び、精神病理学的見地からの統合失調症の病態理解において、質の高い研究を出している有数の国と違って間違いない。本書はそうした日本の精神病理学の伝統に立脚しつつ、著者の日々の臨床経験に根ざして統合失調症を持つ患者の行動特性を周到に論じた著作である。「嘘のつき方が下手である」、「他人との諍いを嫌がる」など平易な言葉で、彼(彼女)らが文字通り「渡る世間は鬼ばかり」の世俗社会で生活するうえで直面するであろうさまざまな困難の内実がわかりやすく語られる。そして最後に、「マイナーな生き方が得意な」「巧みな少数者」であると統合失調症を持つ人々のポジティブな面にも眼が向けられる。精神科リハビリテーションに携わるコメディカル、医師の方々をはじめ、多くの方々にご一読していただきたい統合失調症理解のための指南書である。彼(彼女)らを首尾よく共同社会に錨を下ろせるようきめ細やかな指針を出して、リハビリテーションを実際に進めるうえでも大いに参考になる。

正常規範の規格化が進化する現代において、もっぱら統合失調症の「欠陥」、「障害」が強調される機運が強まっているわけだが、彼らの元来、繊細・鋭敏で、慎ましやかな優しい感性を尊重する態度を堅持することが望まれる。たとえば世俗社会、また邪悪な大人の虚偽を直観的に見て取る彼らの透徹した精神、また親、治療者に対して「献身的な治療者」(HF サールズ)の役割を引き受けようとする心優しい態度を秘めていることも忘れてならないだろう。

(自治医科大学精神医学教授)

● B5 200頁 2006 定価2,940円(本体2,800円+税) 医学書院